

電子患者記録の衝撃

～利用シーンから読み解くスイス電子患者記録の可能性～

ライフデザイン研究部 主席研究員 柏村 祐

1. スイスの電子患者記録(EPD)について

スイスのデジタルヘルスへの取組みは国際的にも注目されている。

デジタルヘルスとは、情報技術やデジタルデバイス、アプリ、データ分析、オンラインサービスなどデジタル技術を医療や健康管理に応用した領域を指す。その目的は、医療の効率化、健康情報のアクセス性の向上、個人の健康管理の最適化など、様々な側面での医療や健康の質の向上を図ることにある。

スイスで、その中心に位置づけられているのが「Swiss eHealth Strategy 2.0」である。そしてこの戦略の中核をなすのが、EPD (Elektronisches Patientendossier、電子患者記録) である。EPD は、患者の医療情報をデジタル化し、安全な状態で管理・共有するためのシステムで、医師や医療関係者は患者の医療履歴や診療情報にアクセスできる。さらに、患者自身も自らの健康情報を簡単に確認でき、必要に応じて他の医療機関と情報を共有することができる(図表1)。このEPDの導入と活用により、スイスの医療は高度化し、効率的なサービスが提供されている。本稿では、電子患者記録の具体的な利用シーンを紹介し、その可能性について解説する。

図表1 EPDの概念図



資料: EPD HP「<https://www.patientendossier.ch/fachpersonen/epd-vorteile/informationsaustausch>」

2.EPD の利用シーン

EPD は、患者の健康情報や医療情報を電子的に保存・管理するシステムのことを指す。これには、病院の退院報告書、在宅医療サービスの看護報告書、薬のリスト、X線所見、予防接種の記録などが含まれる。患者自身がコンピューターやスマートフォンを通じて自宅や外出先からこれらの情報を閲覧できる。EPD が使われる利用シーンは、患者に対して緊急対応が必要な場合、薬の概要把握が必要な場合、複数の疾患を確認する場合などを想定している（図表 2）。

図表 2 EPD が役立つ利用シーン

利用シーン	概要
緊急時の対応	事故で意識を失った時、EPD が迅速な対応を助ける。
薬の概要把握	複数の薬の相互作用を避けるため、薬剤師が EPD で薬の情報を確認する。
複数の疾患	複数の健康問題を持つ患者の情報を、医師が EPD で一元管理する。
家族全員の EPD	子供の病気や予防接種の情報を家族で共有・管理する。
老人ホームと病院の間のコミュニケーション	老人ホームの入居者が病院に運ばれた時、EPD で必要な情報を迅速に共有する。
家族代理人としての役割	認知症の高齢者の健康情報を、家族が EPD で管理・確認する。
常に持ち歩く予防接種証明	旅行前に必要な予防接種の情報を、EPD で確認・管理する。
スイス全体での EPD	事故で病院に運ばれた時、どの病院でも EPD で患者情報を確認できる。

資料：EPD HP「<https://www.patientendossier.ch/privatpersonen/epd-vorteile/einsatz>」より筆者作成

ここからは、公開されている動画のうち、図表 2 に掲載した EPD の利用シーンの中で「緊急時の対応」、「薬の概要把握」、「複数の疾患」にフォーカスし、EPD がどのように役立つのかを確認する。

まず、「緊急時の対応」に関しては、EPD の活用方法が EPD の公式プラットフォームの動画で示されている。ある女性が自動車事故に遭遇し、救急隊員が彼女を病院へ搬送する際、彼女の EPD が活用された。これにより、医師は彼女の既往歴やアレルギー情報を速やかに取得し、適切な治療を施すことができた。特に、ペニシリンにアレルギーをもつ彼女に別の抗生物質を投与する必要があったため、EPD の情報は彼女の命を救ったともいえる（注 1）。

次に、「薬の概要把握」の動画では、ある高齢女性が関節痛の治療で薬剤師の助言を受けるシーンが描写されている。薬剤師は EPD を参照して彼女の薬の情報を確認し、イブプロフェンが彼女の現在の薬との相互作用があることを検知。代わりにパラセタモールを推奨し、それに関する情報を EPD に記録した。この事例から、EPD を使用す

ることで薬の相互作用を避け、患者の安全性を確保できることがわかる（注2）。

さらに、「複数の疾患」では、ある男性が持続的な健康問題を抱える場面が紹介されている。各医療専門家は彼の EPD を参照して治療を進めているが、特に、在宅医療サービスのスタッフは彼の傷の治癒状態を EPD にアップロードすることで、継続的な医療情報の共有を実現している。男性も自らの EPD をオンラインで確認できるため、自分自身の健康管理に積極的に関与している（注3）。

3.日本における EPD の可能性

日本の医療機関では、病院の初診の際に問診票の記入が求められる。また、薬局でも同様の手続きが求められることが多く、患者に相応の労力がかかる。問診票は、患者が医師、医療従事者へ情報を伝える最初的手段であり、なぜ診察を受けにきたのか、どこの具合が悪いのかを自己申告するものである。医師や医療関係者は、問診票により患者の医療履歴を確認するが、この情報の記入と共有のプロセスは、デジタル化されていないためにあまり効率的ではない。

一方、EPD はこれを一元管理し、情報への迅速なアクセスを可能としている。患者が自身の医療情報を確認したうえで、スムーズに情報共有できるので、患者自身の健康管理が容易になり、より質の高い医療サービスが受けられる可能性が高まる。EPD の導入は、デジタル情報を活用した医療サービスの効率化を実現し、医療制度や慣習そのものを変革することにもつながる。

EPD は、患者の利便性と医療の質を向上させる有効な手段になると期待されるため、日本でも、EPD のようなシステムについて研究を進め、その導入を検討するべきではないだろうか。

【注釈】

- 1) EPDHP より
https://youtu.be/Q5NsP077_-M
- 2) EPDHP より
https://youtu.be/_K-kDjKbuBg
- 3) EPDHP より
https://youtu.be/f_1YVN_WVP8